

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 「廟庭」「月夜」論：`私,の人物像を中心に |
| Author(s) | 蔡, 佳真 |
| Citation | 熊本大学社会文化研究, 6: 195-212 |
| Issue date | 2008-03-14 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/10149 |
| Right | |

「廟庭」「月夜」論

— ‘私’の人物像を中心に —

蔡 佳 真

はじめに

呂赫若の「廟庭」と「月夜」が連作となっていることは周知の通りである¹⁾。戦時下、河野慶彦が、“これは結婚に於て女の負はされるものへの痛烈な抗議であり批判である”、“本島人社会に於て、未だ過去のものとは云ひきれない女の宿命の一断面でもあらう”²⁾と評しているのはもはや定説のようになり、「廟庭」と「月夜」は女性の悲劇を取り扱う作品として捉えられている。近年、植民地時代における父権体制という歴史的な文脈に沿って論証されてきた諸説、例えば、呂赫若の‘客観歴史呈現’と‘主観感情抒發’という‘両面性’の結合を見出した呂正恵をはじめ、‘社會疏離化 (social alienation)’を論点に取り入れた黄儀冠、姑・小姑・夫の三人の‘共生體’に踏み込んだ張達雅、等々はいずれもその延長線上にあると言える³⁾。ところが、多くの論者が「廟庭」「月夜」に描かれている女性像に拘泥するのは、“封建的家族制度の中で迫害される女性”⁴⁾の系譜に連なる作品だという先入観にとらわれている傾向があると断じてよい。したがって、この連作に新たな読みを導くためには、まず先入観の一切を排斥しなければならない。

本稿では、物語の叙述方法に注目した。呂がこの連作において第一人称小説という、これまでとは異なる手法を採用したことに関しては従来看過されてきた⁵⁾。しかし、呂が‘私’という人物を設定した理由を探ることは、‘私’を視点人物兼語り手として登場させた一連の第一人称小説へのアプローチとなるはずである⁶⁾。それに対して、陳芳明は‘私’を‘本土的我 (native I)’‘叙述的我 (narrative I)’‘被殖民的我 (colonized I)’に細分し⁷⁾、垂水千恵は「廟庭」と「月夜」の差異の一つとして‘私’に課せられた‘観察者’と‘調停者’の役割を指摘しているが⁸⁾、両方とも厳密な論考とは言い難い。そこで、‘私’が物語の中でどのように位置付けられているかを見極めるために、「廟庭」「月夜」の筋の運びに即して語り手‘私’の在り方を追跡しつつ、その分析によって‘私’の人物像を浮かび上がらせる試みを行っていききたい。

1. 「廟庭」

1.1. 状況設定

物語は、帰郷の夜、母から聞いた“舅父が是非とも私に会いたいといふ話”から書き起こされている。舅父が“一週間程も前から”“毎日のやうに”‘私’の帰郷を問い合わせ、“帰ってきたらすぐに来るやうにと催促してゐる”と説明している母は、その緊迫さとは裏腹に、あたかも事態を把握していないやうに、“何か用事があるらしい”と“憶測”するのみである。有力な情報が与えられないまま、“疲れてゐる”語り手は、“別に私に用事のある筈がない”“遊びに行くのなら何もさう急ぐこと

はない」と一蹴し、「翌朝になつて」も舅父の家へ行くことに「反対」し、「動かうとしなかつた」。しかるに、次の瞬間、図らずも「訪ねることにした」‘私’の不本意が述べられているが、肝心な理由についてはただ「義理上」の一言で片付けられている。とはいうものの、舅父の家の近況を母から聞いた際に、‘私’の気持ちは変わりつつあった。「まづ第一に」“激しく私を満足させた”のは、舅父の家というより“少年の頃の想出が数多くあつた”“關帝廟に隣接してゐる”ところにある。この“想出”とは、“初恋にも似た”舅父の一人娘の“翠竹との数々の想出”“翠竹との間に交はされる楽しい遊玩ばかりだつた”と語っている‘私’は、過去の“想出”を“考へてみるだけに楽しい”、“心は余計にはづんだ”。このような「廟庭」の冒頭部を一読して、現在／過去に対する語り手‘私’の相反する気持ちが僅かながら感じ取れなくもない。これを一つの足掛かりとして、「廟庭」を《表一》のように六つの場面に区切り⁹⁾、その上に筋の展開を現在／過去に二分し、それぞれ語り手が残した痕跡を辿っていくことによって、‘私’の内心の変動を解明したい。

《表一》「廟庭」における状況設定の相関略表

| 場面 | 時間（初夏） | 場所 | 登場人物 | 筋の展開 |
|-----|---------------------------------------|-----------------------------|----------------|---|
| I | 帰郷の夜→翌朝 （着換へてゐる傍ら→ ネクタイを結びながら） | 私の家 | 私、母 | ①舅父が会いたがっていると母から聞く ②翠竹との思い出（a） ③再婚した翠竹についての伝聞 |
| II | 太陽の光線が少し頭に 痛いなと感ずる頃→ 昼食→昼食後（午後） | 田圃路→舅父の店先 | 私、舅父、舅母 | ①用件を切り出さない舅父 ②翠竹との思い出（b）（c） |
| III | 午後 | 關帝廟（→金亭） | 私 | ①關帝廟の現状 ②翠竹との思い出（d）（e） ③翠竹の再婚を祝う気持ち |
| IV | 午後 | 關帝廟附近 （村の道路に出る路 →甘蔗畑） | 私、翠竹 | ①翠竹と再会 |
| V | （午後→）夕方 | 舅父の店先 | 私、翠竹、 舅父、舅母 | ①舅父の用事＝翠竹の再婚を円満なもの にしたいという願い |
| VI | 月の夜 | 午後翠竹とあつた路 →關帝廟（→金亭） | 私、翠竹、（舅母） | ①再婚した現実の翠竹＝思い出の翠竹 |

※○は現在、●は過去、数字とアルファベットの順番は筋の運びの先後を表す。

さて、“これから關帝廟に行つて”“十数年も昔のこと”を“想ひ起すのも悪くない”（I ② a）と心機一転した語り手ではあったが、現実の翠竹と言え、すでに再婚したと知らされた途端、“彼女が居ないことを想ふと寂しかつたものだ”と慨嘆する傍ら、“子供じみた我儘は言つてゐられなかつた”と自己反省をする。先程過去の“想出”に浸った‘私’に現れる感情の起伏と比較すれば、現実を見つめる眼差しは落ち着きを見せている。続いて翠竹の再婚は“うまくいつてゐないらしい”と聞かされた‘私’は“大袈裟に冷静を装”い、また母が微かに匂わせた“用事”の内容に対して“相談してみたところで何の得になるといふのであらう”と“笑つた”ばかりか、即座に“行くのを止める”と言い出し、冷ややかな態度を取る。

そもそも‘私’が最初から“用事”の内容を自ら追究しようとしなかつたこと自体、この件に関しては何ら興味を持たない証左である。それでも、やむを得ず舅父の家に行かなければならなくなった理由は、必ずしも“用事”のためだけだとは言い切れない。むしろ“私には到底役に立ちさうにな

い」と容易に観念した様子は、舅父の“用事”に深入りするのを避けようとしているのではない。勿論、親戚といえども第三者としての‘私’の意見は所詮参考にならないであろうと判断したのも無理はないが、積極的に自分にできる限りのことを努力してみる、という選択肢もあったに違いない。しかし、舅父の“用事”と翠竹との関連をほのめかされても動じないということは、‘私’にとって、翠竹との過去の“想出”は現在の自分が直面する舅父の“用事”に当たる意欲をもたらししてくれる原動力にはならなかったことを示している。

1.2. 舅父訪問

久し振りに訪れてきた‘私’の近況を訊ねるばかりでいる舅父に“用件”を問うてみたが、“意識してその核心から逃げようとしてゐる”舅父の態度から“これはきつと深刻な問題かも知れぬ”と察した。“焦々とさせられ”つつも“結局気長に待つより外はない”と諦めた‘私’は、“気長に待つ”どころか、次第に“或は用件がないかも知れない”と疑問を抱き始めた。“今朝来た時は舅父は何事もなかつたやうな素振りばかりだつた”と思い直してみると、“辞して帰らうとする”行動を取った‘私’は、あからさまに“用件がない”と認めたも同然である。かくして、“用件”そのものの有無をも問い掛けるような方向の転換は、舅父の“素振り”に揺さぶりを掛けられたと見てよいが、その背後には、実は‘私’の言動を反映しているような形跡が残されているのである。その一つに、舅父との“四方山話”の中では翠竹への言及が全くなされていない、ということが挙げられる。舅父の立場からしてみれば、“用件”すなわち翠竹の話を自ら持ち出し難い可能性は十分にある。それとは逆に、“舅父の家といへば直ちに翠竹と頭に浮ぶほど”の‘私’は、“翠竹と仲よく”遊んでいた米搗場も薪小屋も“大して変つてゐなかつた”ことを確認しながら、“翠竹の姿が見えない”ことの“物足らな”さに“人知れず胸を痛めた”(Ⅱ②b)というふうに感慨に耽っていたにもかかわらず、翠竹のことを何一つ聞かなかったのは何故なのか。

振り返ってみると、当初、母が“用件”の情報を漏らした所以は、‘私’が不意に“翠竹の再婚は円満に行つてゐるかどうか”と話のきっかけを作ったことにある。そして“行くのを止める”‘私’を思わず“激しく叱かつた”母の反応からして、翠竹こそが“用件”のキーポイントであることに語り手は薄々気付いたはずだと推測できる。ところが、“用件”を取り立てて問題にしない‘私’は、Ⅰ①③において冷淡な様子を表しただけでなく、Ⅱ①になつてもその真相を進んで究明しようとしないう姿勢を続けている。かかる消極的な態度を念頭に置いて考えれば、舅父と話す折、殊更に翠竹のことに触れないようにしている背景には、母とのやり取りを強く意識していた‘私’が存在するに相違ない。つまり、‘私’は意図的に翠竹の話題を差し控えていると言える。その一方、“舅父の家を見てまはることにした”‘私’を“別に引きとめも”せずに、“私の子供の頃の思ひ出となつてゐる数々の道具や樹木を説明してくれた”舅父は、もしかすると“思ひ出”の“数々”を目の前にした‘私’が翠竹を思い浮かべたついでに彼女の近況を問うのを、本当は期待していたのかもしれない。さらに、“私と視線が合ふとすぐに臆したやうに外らす”“変に人恐れをする卑屈な眼差を落して私の機嫌をとるやうに語り”というふうに語り手の目に映った舅父は、翠竹のことに固く口を噤む‘私’に努めて合わせた挙げ句、“何事もなかつたやうな素振り”を続けるほか仕方がなかったのであろう。そうして“用件”を切り出す間合いを計る舅父を‘私’は“用件がない”と思い込もうとして、ついには“辞して帰らうとする”行動を取ったのだと推測される。

もとより、舅父を訪問したのは“義理上”によるものだと明言している‘私’にしてみれば、舅父を訪問し、“四方山話”をした後“用件がない”と一方的に思い込んだとはいえ、“義理”を果たしたからには、これ以上舅父の家に留まる必要性は認められないと思われる。少なくとも“用件”に熱意を一向に生じない‘私’にとって、“用件がない”ことは取りも直さず舅父訪問をいち早く終わらせるにはまたとない好都合である。現に、“帰らうとする”‘私’が、舅父に“ゆつくり話もあるから……”と引き止められた際に一瞬あらわにした“嫌”な気持ちは、語り手の本心の一端を窺わせている。“しかし、だからといつて帰るわけにもいかなかった”と“再び店先に腰を下ろした”‘私’の様相からは、またもや“義理”が働き掛けているように感じられる。しかもそこには、これから明るみに出されていく“用件”に応じる‘私’の出方に潜在している本質が浮き彫りにされている。

1.3. 過去への執着

廟庭で“お尻を丸出しにし”“とんぼを追つてゐた”子供達に誘発され、“翠竹と一しょにあんな格好で其処で遊んだ”(Ⅱ②c)記憶が蘇った‘私’は“恋しさ一ぱい”の気持ちで關帝廟に入ってみた。“甘蔗の枯葉が堆高く積まれ雑草が茂つてゐた”廟庭を一目見て直ちに“これは立派に祭典が行はれてゐない”と解し、その荒廃ぶりを“關帝爺の靈験が落ちたのと時勢の奔流”に起因していると推し量った‘私’は、“部落民の倉庫になつてしまつたのにちがひない”關帝廟が本来の宗教的役割を完全に失ってしまったことに対する残念さを嘆くような衝動に駆られることなく、単なる荒廃よりもきちんと再利用されている現在の有様を冷静に観察している。

そうした廟の現状を目の当たりにした‘私’が“想ふものは翠竹のことばかりであった”。例えば、翠竹とはじめて“關帝廟の祭祀を觀にきた時のこと”(Ⅲ②d)を“忘れることが出来”ず、“懐しさが胸一ぱいになるのをどうすることも出来なかつた”ことや、翠竹が“先夫に死別して実家に帰つてきた時のこと”(Ⅲ②e)を“今でもはつきり覚えてゐる”。当時の“状景を思ひ描いて”“少年の頃から私には舅父の家は翠竹が居てこそ面白かつたのだつた”と本心を吐露していながらも、現在の翠竹のために何ができるかと自問してみると、ただ“秘かに昔の面影を偲んで彼女を想起し”、“彼女の幸福を願ふばかり”であった。しかし、“靈験がおちた”“關帝爺の前に立つて”“彼女の永遠の幸福を祈りたい”ということ自体は何という虚しいことであろう。あたかも語り手の願いである翠竹の幸福は到底叶えられそうにないことを暗示しているようである。しかも“幸にもいゝ再婚をして新しい幸福に入つてゐること”も全くの出鱈目であり、母から聞いた“近頃はうまくいつてゐないらしい”という情報を‘私’は聞き捨ててしまったばかりでなく、事実無根の仮象まで捏ち上げてしまっている。結局、うつろな“幸福”という錯覚に陥っているとも知らずに、“声をあげて叫びたいほど満足感に浸つた”‘私’のこの自らをも欺く言葉は、自分勝手な想像に築かれたただの偽りに過ぎず、決して本当の“満足感”ではなかった。

以上述べてきたことを一旦整理してみよう。《表一》の如く、筋の展開において現在の時点を表すⅠ①③・Ⅱ①・Ⅲ①③の合間に過去の記憶を示すⅠ②・Ⅱ②・Ⅲ②が挿入されていることは明瞭である。さらに確認しておくと、舅父の“用件”に取り掛かる‘私’の無気力な対応を描き出し(Ⅰ①・Ⅱ①)、關帝廟の荒廃を分析する(Ⅲ①)に当たっては理性に基づいて思考し判断するのにくらべて、翠竹との“想出”(Ⅰ②・Ⅱ②・Ⅲ②)はもっぱら感情的な口調で織り成されている。それに、再婚した翠竹(Ⅰ③・Ⅲ③)の仮象に真情を流露したかのような見せ掛けには、真実に目を逸らしたい語

り手の本音が見え隠れしている。これは“想出”への一途な思いとは明白に性格が異なっているが、前向きに“用件”に取り組まず、避け逃れようとする気持ちとは共通している。詮ずるところ、語り手は現在における舅父の“用件”や再婚した翠竹の実情を否定的・消極的に取り扱う反面、過去の記憶を肯定的・積極的に思い出す傾向があると理解してよい。この設定は、ほかならぬ現在／過去の異質性・対蹠性を際立たせる効果を生み出している。また、現在の情景が“昔を想ひ起す”誘因となった仕組みが物語中に散在しているものの、過去の“想出”はあくまで過去のものとして、現在に発生した事件に干渉することは一切見当たらないことから、現実よりも“想出”に引き付けられている語り手の一面が見て取れる。要するに、物語の前半（Ⅰ～Ⅲ）は過去の“想出”に重点が置かれていると考えられるのである。

1.4. 翠竹との再会

翠竹との“想出”に夢中になっている‘私’が、現実の翠竹に対してはほとんど気に掛けていないことは既述した通りである。事実、關帝廟附近の甘蔗畑で翠竹と偶然出会うまで、母から断片的に得た情報以外何も知らなかった‘私’は、実際に自分の目を通して見た翠竹の、“ひどく元気がなさうに、いかにも病んでゐるらしい”様子に呆気にとられ、何年ぶりの再会にもかかわらず“一言も発せず然も逃げるやうに歩み去つた”彼女の行動に“ひどく意外の感に打たれ”た。余りの変化にすっかり気が動転してしまった‘私’は、脳裏で“しきりと想ひ描い”た翠竹に照らし合わせつつも、“昔の面影”が“今では微塵もない”現実を直視せざるを得ず、“激しく心を痛めつけられ”“悲しくさへなつてきた”。これまでの追憶とは違う現実の翠竹の形象は、現在／過去の対比によってその甚だしさが一段と際立っている。一口で言えば、‘私’が翠竹から受けた印象は、現在の姿形（＝再婚した翠竹）と過去の“想出”（＝“少女時代”の翠竹）との相異なる二つに分裂したのである。かくして、Ⅰ～Ⅲの曖昧な状況説明に一区切りを付け、Ⅳにおける現実の翠竹への具体的な描写は、以下の新たな場面へと展開していく。

翠竹の後に付いて舅父の家に戻ってきた‘私’を前に、“すっかり兜を脱いだ”舅父はやがて重い口を開き、婚家で姑と小姑に虐められた翠竹の再婚の実態、それに“離縁したいと本人が言つてゐる”問題で“あなたの意見を聞かうと思つて呼んだのだよ”と明かした。今しがた翠竹のあの“何といふ変つた姿”を見た途端、“どうか結婚が不幸の原因でないやうに”と“念じたい気持”も虚しく、“不幸”の再婚が原因で翠竹は“あの通りやつれてしまつてゐる”ばかりか、それが引き金となった離婚問題こそが舅父の“用件”でもあることが判明する。ここで着目すべきなのは、語り手‘私’が置かれている立場及び結婚に対する見解である。この2点を考察する一つの手順として、まずは離縁をめぐる舅父対舅母の口論を検討する必要がある。

最初は、“離縁したところで必ずしも幸福だとは限らないし”“もつといふ、処へ行けるとも考へられないし、多少は我慢した方がいゝ”と離縁反対を主張する舅父ではあったが、自分のその“妥協的な態度”を舅母が激しく“批難し始め”ると、一転して“親の義務”“名誉を考へて見ろ”と反論し、娘を二回も嫁に出した自分は親としての“義務”がすんでおり、その上自分の“名誉”を守らんがために“今度といふ今度は絶対”娘に“我慢”してもらふ心積りを見せている。言い換えれば、娘の幸せよりも娘への愛情よりも“名誉”“義務”に内包された自分の社会的立場を舅父は重要視しているのである。しかしながら、依然として強く歯向かった舅母に対して、舅父はつい“相手に握られてゐ

る” “三百円の持参金と調度品”を“絶対に捨てる理にはいかぬ”と再婚（結婚）に際して必ずや絡んでくるであろう金銭問題を口にした。それでもまだ抵抗し続ける舅母に“腹を立てゝゐた”舅父は“祖先の位牌に姑婆を祭る理にはいかんからな”と追い討ちを掛けた。“名誉”“義務”“お金”はともかく、結婚にまつわる社会的規範を投げ付けられたが最後、なす術を知らない舅母は“とう／＼泣きだして立つて寝部屋に入つて行つた”。これは、たとえ娘のことを如何に可愛がってその境遇を労わり、離縁に賛成する舅母であっても、とどのつまりは社会的価値観に束縛される一個人に過ぎなかったことを示している。ただし、翠竹の立場に身を置いた舅母が“離縁したい”という娘の意志を尊重しているのと比較すると、世間体を気にしている舅父は嫁いだ娘のあるべき姿を翠竹に強要している。

その一方、‘私’は何のためらいもなく舅父に同感の意を表明した。“一応円満に行くやうに解決を講じたらどうですか”という‘私’の助言を受けた舅父から“あなたに一つその役目を引き受けてもらひたいんだ”と頼まれた時、咄嗟に“困つた”と‘私’は思ったが、“舅父の困つてゐる様子と、私を頼りきつてゐる気持を見ると”、“舅父への愛情の一つとして引き受けてみようかと”決意した。当事者である翠竹のためではなく“舅父への愛情”が決め手となったことに誰しも違和感を感じずにはいられない。それどころか、舅父のやり方に抗弁する舅母の着物を“ひそかに”“引張つた”挙動も、‘私’が“氣一本の舅父の性質を知つてゐる”ためであったことから、舅母の翠竹を思う必死の形相を差し置いて舅父の“様子”“気持”を最優先に配慮する‘私’の心遣いは一目瞭然である。この思慮深さこそが‘私’を舅父の意見に賛同するような立場に駆り立てたのだと考えられる。そうした‘私’の立場を支えているものの背景には、文中に時折嵌め込まれている‘私’の結婚観がある。

I ③において、はじめて翠竹の再婚を聞いた‘私’が直感的に彼女の“再度の幸福の到来を喜んだ”のは、再婚（結婚）と幸福を等号で結ぶという図式によると察しが付く。その証拠として、III ③には“幸いにもいゝ再婚をして新しい幸福に入つてゐることは、何よりも私には嬉しいことなのだ”と述べられている。それに、“今度の主人は少々中年の紳士で相当な地位についてゐると聞いてゐる”だけで“いゝ再婚をし”たと決め付けていることから、‘私’は主人の“地位”でよい結婚か否かを判断していることが窺われる。また、翠竹が受けた“残酷”な仕打ちを語っている舅父に“しかし、主人は相当な地位に居る人だと聞きましたが、そんなことを平気でやれるとは思ひませんが”と反問するのも、“主人は相当な地位に居る”こと、すなわち“いゝ再婚”であると思ひ込んでいるからである。このように、“翠竹の再度の幸福”は“いゝ再婚”にあり、“いゝ再婚”に繋がるのは“相当な地位に居る”主人であるという発想からは、女の幸せは結婚相手の社会地位に左右される、という‘私’の固定観念が汲み取れるのである。このことは、舅父の“やつと再婚出来て安心してゐた”という考えに通じていると共に、結婚問題を扱う上での‘私’と舅父との認識の間には似通った点が存在していることを裏付けている。加えて、“妻が母と妹に虐められても平気”でいる主人の不甲斐なさを舅母が訴えているにもかかわらず、“驚くより”“呆れた”‘私’が躊躇なく“離縁は最後の手段”であると舅父の意見に同調した理由もここにあると見てよい。

1.5. 義理—‘私’を支えるもの

舅父の妥協案に賛同した‘私’が“一ぺん相手に会つてとくと話して来ませうか”との約束をしたことは、打開策を立てるのに一役買った‘私’の立場を明示してはいるものの、“用件”における‘私’の立場を見据えるにはまだ不十分である。そこで考察を要するのは、現実の再婚した翠竹に接

した‘私’の心境である。以下はVの翠竹登場後に明かされる‘私’の胸中に焦点を合わせてみよう。

舅父に呼ばれて“顔を下げて恥ずかしさうに姿を現はした”翠竹を“冷静に自然な表情で”“眺めた”‘私’は、あたかも自分とは無関係であるような様子を見せている。そして、“自分のみじめな姿を曝されるのを非常に苦痛に思つてゐるらしい悲しげな容子だつた”翠竹を目前にしながら、“嘗て遊び合つた翠竹が今こうして私を他人視してゐるのを甚だ不満に思つた”としか頭にないのは、翠竹の苦しみに気付かず自分の気持ちを重んずる‘私’の思い遣りの無さを示唆している。しかも、舅父に声を掛けられても“耳に入らぬやうな放心の状態である”翠竹を見て、何故“黙つて窓の外をぼんやり眺めてゐた”のかを気遣うどころか、“何か言はねばならない自分の義務を突然感じた”とあるように、“自分の義務”のみが‘私’の意識を占めている。さらに、‘私’の質問に“さつと顔色を赤らめ、口を緘んで哀願するやうに私を見つめた”翠竹の様子と並べると、ただ“暗くなつてきた外を見ながら、今日は愈々帰れないとあきらめた”‘私’の無情さは一層顕著になってくる。のちに、“怒気を発し”た舅父に“再び追求”された翠竹が“突然激しい感情で両手を顔に持つてみると、わあつと泣声をあげ”“顔を掩ふたまゝ、寝部屋に駆けて行つた”後姿に“驚いてとび上り、言葉が出なかつた”のは、‘私’が最後まで翠竹の気持ちを理解することができないがゆえに、その行動を受け入れることもできないことを如実に示している。

上述のように、‘私’は翠竹の表情を注意深く観察していたが、その“苦しげな顔付”に秘められていた内部の感情に些かの関心もなく、彼女から“虐待する家族の気持の根拠”と“解決に都合がいゝ”証言を得るほかに立ち入るつもりは毛頭ないことも明らかになる。同じく翠竹の証言を促し、“解決のために必要なことぢやないか”と言い張った舅父に対して、その“分り切つてゐること”を“殊更に思ひ出させる”非情さは“翠竹を殺す”凶器ともなり得るのだと舅母は“喰つてかかつた”。そうして再燃した舅父と舅母の口争いを側で聞いていた‘私’は、“もと／＼それを提議したのは自分だつた”ことに“恥かしさとすまなさで顔があげられなかつた”と、一先ず良心の咎めを自覚しているふうには見受けられる。しかしながら、“責任上舅父母の争ひをとめるべきであつたが”“さうする勇氣もな”く、“黙つてゐるより外なかつた”胸中を通して、“責任”から逃避するばかりか、ひたすら保身を図るやうな‘私’の一面が見え透いている。詰まるところ、“どうしようかと思ひ迷つてゐる”‘私’の困惑ぶりからは、決断力に乏しい形象を把握することができる。

こうして、作品中に鮮明に映し出されている‘私’の無理解・無関心・無責任は、‘私’の傍観者としての立場を意味すると同時に、舅父の“用件”や再婚した翠竹に対する‘私’の否定的・消極的な姿勢が如何なる状況下においても終始一貫している‘私’の人物像を端的に集約している。となれば、前出した‘私’の行動を強く束縛している“義理”という要素はここにも反映しているはずである。冒頭で舅父の家に行くのを渋った‘私’が結局訪れなければならなかった理由、それに昼過ぎには“辞して帰らうとする”が“帰るわけにもいかなかつた”背後に潜んでいる“義理”の働きは前述した通りである。この帰りたいが帰れない気持ちは、翠竹と直接向き合つた折に‘私’が上の空で“今日は愈々帰れないとあきらめた”気持ちと同じである。つまり、翠竹が自ら口を切るのを待っている‘私’が無意識に表した自分とは関係のない問題だという態度は、自発的な意志とは違う“義理”の働きによるものであつたがゆえの反動かもしれない。同様に、“用件”に応えようとする‘私’の傍観者としての立場や‘私’が提出した解決法も然りであり、さらには‘私’のすべての言動は“義理”によって縛られているとも言える。

1.6. ‘私’の人物形象

身を隠した翠竹を探しに關帝廟に入った‘私’は、金亭にもたれている翠竹を見つけた¹⁰⁾。“彫刻のやうに身動き一つせず”ただ“黙つて、廟の屋根をぼんやり見つめ”、“呼吸の音さへ聞きとれない位に静か”だった翠竹を‘私’は少し離れたところで観察した。そして雲間から洩れてくる月の光で見た翠竹の顔・眼・脛・涙に‘私’は“激しく心を打たれ”、“自分の眼からも涙が溢れ出たのをはつきりと感じてゐた”。“静か”な翠竹とは対照的に、感情の高揚を抑え切れない‘私’は衝動的に“翠竹を救ふためならば彼女と結婚してもいい。今の妻を離縁してもいい、と心で呟”いている。

眼をとちると、少女時代の翠竹の顔とやんちゃな叫び声が想ひ出され、眼を開けると、あの日此処にこうして彼女と金亭に今と同じく立つてゐたことが懐かしく心に浮んできた。

‘私’が“眼をとち”て見た“少女時代”の翠竹は“眼を開け”て見た“今”の翠竹と重なり、これまでは平行で交わることのなかった翠竹の“昔の面影”と現在の姿形が“月の光”の下ではじめて一つになった。ところが、“眼をとち”ても“眼を開け”ても昔の翠竹の顔や声しか“想ひ出され”ず、過去の“懐かし”い思い出しか“心に浮んで”こない‘私’は、目の前にいる現実の翠竹を救うために積極的に働き掛けようとはしない。また、“結婚に依つて”人生が“造作なく覆返され”“滅され”てゆく“翠竹の悲しむべき運命”を思うと、“何故女はそんなに弱いのだらうか”と理解に苦しんでいる‘私’がようやく得た“畢竟するに翠竹が女だからだ”という結論は、根本的な原因を見抜いているとは決して言えないのである。

以上の検証をもとに、「廟庭」における語り手‘私’の人物像をまとめてみよう。物語は舅父の“用件”・翠竹の再婚・翠竹との“想出”の三つの要素から成る。この三要素を通じて描かれている‘私’の感情はおおよそ“想出”の中の翠竹に対する愛着と、舅父の“用件”並びに再婚した翠竹への無関心との両極端に分けることができ、過去（の翠竹）への想念が強ければ強いほど現在（の翠竹や舅父の“用件”）に対する冷淡な態度はより容易に看取できる。かくも激しい過去と現在との落差を最も反映しているのは、舅父の“用件”（＝翠竹の離婚問題）に対応する‘私’の姿勢なのである。

ところで、窮地に追い込まれている翠竹のことを“放つて置けないことですよ”と事態が差し迫って深刻であることを認めつつも、消極的に舅父の“妥協”を是認する‘私’には別の選択肢はなかったのか。“何か相談のある場合、舅父は非常に私を信用し頼りにしてゐる”という‘私’の自信ぶりからして、積極的に舅母と一緒に舅父を説得すれば納得させられる可能性は大いにあったと予想されるが、それでも‘私’にはどうしても舅父の肩を持ちたい事情があったのである。次節で取り上げる「月夜」の冒頭で述べられている‘私’の結婚観に鑑みれば、「廟庭」における‘私’の行動と「月夜」における‘私’の考えとは明らかに食い違っている。この表裏のある言動を説明できるものがあるとすれば、それは“義理”が持っている重みである。例えば、舅父の“用件”に関心を持たない‘私’がここまで付き合うようになった背後には、筋の展開（Ⅰ①→Ⅱ①→Ⅴ①）を繋げている“義理”の強い働きがあることは前項で論じた通りである。同様に、翠竹の苦境に手をこまねき傍観してでも“それ程怪しからん相手なら無理する必要も認めない”という“私個人としての意見”を表明せずに、もっぱら舅父の言葉に合わせることも、“義理”の働きによって“用件”に携わる‘私’は余計な口出しをする必要はないと判断したからだと思われる。そのため、舅母と手を組んで自分を信頼

している舅父を説得することを無意識に拒んでいるのかもしれない。仮に‘私’から“義理”を取り去ってしまえば、恐らくは物語自体の進行に支障を来すようになるのであろう。そのことは後述するように、「月夜」の最後の場面において、“義理”をも果たすことのできなかつた‘私’がただただ呆然とするしかなかったことから窺い知ることができる。

死んだかも知れない。みなあなたの故だよ。夫に捨てられるし、姑に虐められるし、帰つてきては父に叱られるし、翠竹が死に行くのも当前だよ。

店先から聞いてきた舅母の“泣き声”に応えたかのように、“涙がキラリと光つて一滴二滴、静かに流れ落ちた”翠竹を目にして、‘私’は何とも思わないふうに“翠竹を促して廟庭を出てゆかうかと思つた”。“廟庭”に響き渡る舅母のこの意味深長な言葉が、よもや翌日の“月夜”に起きる“翠竹の悲しむべき運命”の前触れであるとは感付かずに聞き流したばかりか、最後まで翠竹の心の声に耳を傾けることもできず、翠竹の立場になって考えることもできなかつた‘私’は、“甘い感傷に浸つた”以外にどうすることもできなかつたのである。

2. 「月夜」

まずは「月夜」を《表二》のように四つの場面に区分し、「廟庭」と同じく状況設定の相関略表を作成した。特に注目したいのは筋の展開には執筆時の感想が挿入されていることである。以下では、事件の発生に対処する語り手‘私’の出方に隠されている真意を探ってみたい。

《表二》「月夜」における状況設定の相関略表

| 場面 | 時間（翌日） | 場所 | 登場人物 | 筋の展開 |
|-----|-----------------------------|-------------------------------------|--------------------|---|
| I | 午後→夕方 | 婚家へ行く路 (歩行→自動車→歩行) →婚家附近 | 私、翠竹、金蓮 | ①結婚観 ②これまでの状況説明 ③婚家に着くまでの心境 |
| II | 夕方 | 婚家 | 私、翠竹、金蓮、 姑、小姑 | ①姑・小姑の第一印象 ②姑・小姑との交渉ぶり ③翠竹泣き出す |
| III | 午後五時半すぎ | 婚家 | 私、翠竹、金蓮、 姑、小姑、夫 | ①夫の第一印象 ②執筆時の感想 ③夫との交渉ぶり ④翠竹の反撃と交渉の決裂 ⑤執筆時の感想 |
| IV | 既に日が暮れて街 灯がついてゐた →円い月 | 街の路地→街路 (→自動車の乗降場) →婚家→田圃道→埤圳 | 私、翠竹、金蓮、 (姑、夫) | ①帰り道に着く ②金蓮と婚家へ引き返す ③婚家を飛び出す翠竹を追い掛ける ④入水自殺を図った翠竹の救助を試みる ⑤執筆時の感想 ⑥翠竹は救助されたが‘私’は途方に暮れる |

※○は現在、●は過去、数字とアルファベットの順番は筋の運びの先後を表す。

2.1. 婚家への道筋

冒頭において、語り手は“結婚が女の一生に与へる大きな役割”という“社会的”“道徳的”価値観を判断の基準とする一般論を“われわれ”が見てきた“数々の事実”によって繰り広げながら、“台湾女性の親達がすげなく娘を処分しようとする気持ち、また宜なる哉である”¹¹⁾と嘆じている。かかる親達の立場から娘の“結婚資格”を論じるが如く、“翠竹を娘にもつ舅父の身になつて考へてみる”語り手のその姿勢は、“今の結婚に我慢させそこに何かの融合点を見出した方が得策のやうに思はれ”、“この事件に一役買つて出たわけ”を傍証している。その反面、実のところ“これ程怪しからん相手なら無理する必要も認めない”という“私個人としての意見”を一度たりとも表に出すことがなかったことを併記しているのは、語り手‘私’の言行不一致を露呈させるための仕掛けにほかならない。そして、自分の考えを飲み込むまでして舅父の親としての立場に立って“用件”に臨まねばならぬ理由と言え、まさしく“自分の無力”そのものであると語り手自らの分析によって明らかにされている。一方、「廟庭」において舅父と舅母各自の主張が詳述されていたのに比して、黙秘を通し続けてきた翠竹自身の意向としては、「月夜」になってはじめて“死んでも再びと婚家に戻らぬといきまいた”の一言で要約されているが、“舅父の強圧と私の説明”に押し付けられた挙げ句、到頭婚家に戻ること“頭を縦にふつた”のである。かくして、「廟庭」における‘私’と翠竹にかかわる描写不足の部分を補足しつつ、これから展開していく「月夜」の主眼となる“翠竹の婚家にのりこんで話を運ぶこと”における自分の役目を“舅父の代理人”であると位置付けている‘私’の姿勢を予め分明にしておく、という形で物語が再開される布石のようにも読める。

さて、“翌日の午後”に‘私’は翠竹と付添人の金蓮三人が翠竹の婚家へと発った。“首を垂れて私の後を力なくついてくる”翠竹に“次第に話かけるのがおつくうになつた‘私’は、“この場の気まづい空気をまぎらはさうと”“眼の前に展ける”景色を眺めたりしているうちに、子供の頃、翠竹と“山歩きに行つた時のやうな錯覚におちた”。その“実に楽しい、夢みるやうな一瞬間”に“嬉しさを感じて、胸の動悸うつのを覚えた”‘私’が子供の頃の翠竹への特別な感情は、「廟庭」の余韻がなおも残っているように見えるが、創作手法において、翠竹との数々の“想出”を能動的に思い起こす「廟庭」の描き方は、事実を間違つて知覚する受動的な“錯覚”とは性質が異なっている。現実の翠竹を過去の翠竹と勘違いして“後に恋人をしたがへてゐる”やうな“錯覚”を顧みて“我乍ら赤面した”反応は、現実離れた“夢”を恥かしく思う‘私’の理性が働いているからだと解釈してもよいが、或いは現実を逃避したいがゆえに‘私’が故意に“錯覚”を起こしたとも判断できる。そこで、“現実と呼びもどされた”途端に“二度目の結婚に破れようとしてゐる翠竹を後に意識した”‘私’が“現在の重苦しい状態から抜け出”たい心情に目を向けたい。

“舅父の代理人”として“身の責任重大なるを知”つた‘私’は、婚家に行つて“翠竹を可愛がつて置いてくれと頭を下げる”という“今日の目的”を十分に理解してはいるものの、そのやり方について、“何れが翠竹のためによいかといふ問題にぶつかると”“はたと当惑し”、また“どういふ風にして”“翠竹のために一肌ぬぐ”かと“反問されると困る”というような現状に直面して、“初めて自分の無力をはつきりと感じた”。もとを正せば、最初から翠竹の立場に立とうとはしなかった‘私’がどれだけ“翠竹のため”に考えたとしても“なか／＼に纏まらず”じまいになるのは無理もない。しかも、口では“翠竹のため”だと言いながらも、“すつかり諦めきつて両の眼だけが余計に大きく見られた”“翠竹の表情は益々暗く、その足どりは愈々重かつた”というふう苦しんでいる様子を見

て見ぬ振りした‘私’は、“翠竹のため”を思って行動しているというより、むしろ自分の行為を正当化するための口実を作っているように感じられる。つまり、“今日の目的”を遂行するという大義名分のもとに、婚家に戻るのを“恐がつてゐる”翠竹の姿に目を背けた‘私’が敢えて自分に“翠竹のため”だと言い聞かせているのは、ことによると良心の叱責から逃れるための言い訳なのではないかとも推察される。しかし、そうした考えが逆に精神に負担を与えたため、“私自身も、あるひは翠竹以上の困憊ぶりだつたかも知れなかつた”と漏らしているのであろう。

このように、“現在の重苦しい状態”と先程の“実に楽しい、夢みるやうな一瞬間”との対比は、現在／過去の異質性・対照性を際立たせる「廟庭」の仕組みと異曲同工の趣が見られると同時に、‘私’の極端な感情の揺れを通じて、現時点での“当惑”“無力”“困憊ぶり”が余計に強調されてしまう。加えて、“今日の目的”を如何に果たすかということしか頭にないにもかかわらず、“翠竹の幸福のため”を思えばこそ婚家に連れ戻すのだという大義名分にしがみつくと語り手の、“これから戦場にのぞむ自分が悲壮なものに思へてくる”という‘私’の心中は、あたかも物語の悲劇的な展開を予告するかのように綴られている。

2.2. 姑・小姑との対決

初対面の姑・小姑に感じた第一印象を“何といふ陰気な不快な顔であらう”と言い表した‘私’は、まず好感を覚えていないのは間違いない。次いで姑の“馬面”、“意地悪”そうな細い目、ほとんど抜けた頭髮、“そつ歯”、皺だらけの皮膚、“纏足”、“瘦せて骨張った体”を観察し、その“不潔な、優柔不断な、阿片吸飲者のやうな様子”や、“如何にも世間など外にした、自分勝手な世界に君臨してゐる表情”を捉えた‘私’は、“これならば翠竹に体刑を加へる位は平気だと思はせる”というふうには、客観的な根拠なしに姑に抱いた非好意的な先入観にとらわれている。そればかりか、“愛嬌も女性としての魅力もなく”“恰も男の出来損が化粧してゐるみたい”な顔立ちをしている小姑のその姑よりも“一層毒々し”い表情は、“他人を嫉妬し自分の出来損を苦しめての反撃としか見へ”ず、“噂でも、翠竹の話ぶりからでも”小姑が虐待を“策動”する“中心人物のやう”であると思うと、“成程、これでは兄嫂なる女性の幸福な結婚生活を黙つて見てはゐられないだらう”と頭ごなしに決め付けた。こうして、姑・小姑と対面する前に植え付けられた偏見を露骨に表した‘私’は早くも冷静さを失い掛けている。にもかかわらず、姑・小姑が次々と辛辣な悪口を言い放つ度に、“反動的にむかへ”としながら“も”、“このままでは話がこちれてしまふに違ひない”と“強いて笑顔”を保っていたが、“あくまで譲歩しなければならない”“黒をも白と言はなければならない”‘私’は、自分の“むづかつてゐる”“むかつとした”気持ちによって次第に理性が崩れ始め、ついに抵抗姿勢に転じてしまう。その結果、姑・小姑の翠竹に対する人身攻撃が一段と激化するに連れて“ますます泣きぐづれ”る翠竹を目の前にした‘私’は、自分の抵抗が逆効果を生んだのを反省するどころか、“もう女共を相手にすまい”と匙を投げる。

顧みるに、‘私’が“一朝中作戦をねつた”末、翠竹の婚家へ発った時間帯を午後を設定した理由は、“女達に当るより翠竹の夫なる男にぶつかつた方が得策だと考へて、彼の退勤時をねらつての行動だつた”と説明されている。しかるに、夕暮時に婚家に着いた‘私’は何故か“意外に晩くなつたのを後悔し”た。その真因については不明であるが、‘私’が後悔したこととは正反対に、夫の不在により、出し抜けに姑・小姑との正面对決に突入する羽目となった。かくして“翠竹の夫のみを相手

として話をすすめるべく腹を決めた”という予想に狂いが生じたのが‘私’の第一の失策であった。

2.3. 夫なるもの

第二の失策は翠竹の夫を見損なったことであった。翠竹の夫に対する‘私’の認識はと言えば、“相当な地位についてゐる”“中年の紳士”くらいに止まっているが、姑・小姑と並べれば、決して悪いイメージではなかった。これが翠竹の夫のみと話し合う“作戦”を立てた所以でもあると考えられる。実際に‘私’の目を通して見た夫は、“一時代前の知識人と色男とを混ぜたやうな男だつた”が、礼儀正しくて“なか／＼の社交家らしく聡明”のようであり、“流石はこの町の青果会社の会計をやつてゐるだけあつて、これならば話もしやすい男だ”と“ひそかに喜んだ”。ところが、ここに物語とは明らかに時間の流れが違う、執筆時点から過去を振り返った一文が挿入されている。

今にして思ふと、全く厚かましい男だといふより外にないのだ。やはり妻を八人も変へただけの強か者だけあつて、一見社交的な彼の行動は、凡べてその心理とそぐはないことばかりであつた。(Ⅲ②)

何故ならば、翠竹の話を持ち出すと、ひたぶるに“薄笑の表情で”自分の母親と妹が“代りにくどくど翠竹のことを非難”するのを“黙つて”“うなづいてゐる”だけだった夫は、“完全に私の期待を裏切つた”からである。とはいえ、‘私’の期待というものは、ひとえに夫の地位に依拠したものに過ぎなかった。「廟庭」で論じてきた通り、夫の社会地位から物事を判断するという固定観念にとらわれたことこそがその本性を見抜くことができない要因であるにもかかわらず、一方的に“私の期待を裏切つた”と身勝手な言い逃れをした‘私’は、自分の手痛い失策を伏せておこうとする姿勢が見え隠れしている。それに、終始“無言の薄笑を以て私から逃げた”夫の態度に“躍氣となつて、彼を話相手に掴まへようとした”行動からは、事態を挽回するための努力が見られるが、まさか“皮肉なつぷりに言つた”つもりだった“喩話”が思いも寄らぬ失言となり、夫は“ぶいと席を立つて二階に上つてしまつた”。夫の退場によって、“翠竹の夫のみを相手と”する“作戦”は事実上挫折してしまい、その上、“眼から火花をだして”“口汚く翠竹を罵りはじめた”姑・小姑の激高を静めることもできなかった‘私’は、自分の不慮の発言で事態を悪化させる一方であった。

2.4. 翠竹の抵抗

そこで、もう一つ‘私’の予想外の事態が発生した。それは、‘私’が一度たりとも配慮しなかった翠竹の振舞いであった。婚家に到着してからの翠竹の振舞いと‘私’の反応を整理してみると、次の通りになる。

- (1). “翠竹を見ると、この寔れた可哀想な女は、横顔をこちらに向けて、眼を伏せ、洋傘を尚胸の高さに握りしめたまま、ちつと立ちつくしてゐた”。
→ “私は眼で、翠竹の夫を探した”。
- (2). “翠竹は堪まりかねてゐるのであらう、息の乱れてゐるのが私にはよく分つた”。
→ “私は、舅父のことを頭に思ひ浮べてゐたのだ”。

(3). “私よりも翠竹が顔面蒼白となつて、ハンカチを顔におしあてると肩をふるはせた”。

➡ ‘私’ は“黙つてゐる”。

(4). 翠竹は“急に声を立てて泣きだした”。

➡ “私は翠竹の洋傘をひばつた” “話の邪魔になるのぢやないか”。

姑・小姑の登場に連れて、翠竹の体を駆け巡る不安と緊張感の高まりは、姑・小姑が毒舌を振るい始めるやいなや、徐々に息が乱れ始め→顔から血が引き、肩が震え→到頭泣き出してしまうまでの微妙な変化を‘私’は観察していた。しかしながら、事の深刻さを反映するかのように変化していく翠竹の表情から彼女が置かれた苦境を理解しようとはせず、‘私’は、(1)“作戦”通りに夫の姿を探し、(3)姑・小姑の当てこすりに呆れ果てて返す言葉もなく、さらには自分の抵抗姿勢がもとで余計險悪になった事態を泣き出した翠竹に責任を転嫁し、(4)“話の邪魔になるのぢやないか”と叱責した。それとは逆に、事が思わしくない方向へと展開していくとすぐに、(2)“舅父のことを頭に思ひ浮べてゐた”ことは、取りも直さず“舅父の代理人”としての自分の責任を最優先に考えていたことを暗示している。このことは、“一応は私を信頼することに肚をきめた”翠竹を裏切る行為にほかならない。事実、姑・小姑の“罵る言葉”をかわす手立てもなく、‘私’に理解してもらうこともできない翠竹は“ますます泣きくづれた”のである。続いて、夫の退場を招いた原因は自分にあると認めながら、またしても“舅父の顔を思ひ浮べ”た‘私’は“ひとつあやまることに腹を決めた”と謝ったが、その“言葉に勢を得た”姑・小姑はかえって“勢すごく迫ってくる”。その時の翠竹の変化を‘私’は見逃してはいない。

翠竹は唇をかねて涙の乾いた眼を口惜しさうに外に向けてゐたが、〔中略〕次第に堪へられなくなつたもののやうに唇がわな／＼と小刻みに顫え出し、顔の皮が縮小して色を失ひはじめ、果ては涙が一滴一滴とすべり落ちた。

このような“かつて見たことがない”翠竹の“深刻な顔付”を“余程こらへようと努めながらこらへ切れないで苦んでゐる内面的な戦ひ”と受け取った‘私’は、“姑と小姑が辛辣な言葉を浴びせる度に、顔を歪め、呼吸を乱して唇をビリビリと顫はせながら今にも爆発しさうな気配”を察知した。にもかかわらず、何故翠竹が“とうとう意を決し”て姑に歯向かうようになったのかを‘私’は詮索しようとしな。理由はただ一つ、“舅父の代理人”である‘私’が“とにかくこれから円満にして下さい”という“今日の目的”を達成するためには、翠竹の望みや意志など取り立てて聞く必要もないからである。それゆえに、翠竹の抵抗に取り乱した姑・小姑が“翠竹を打つつもりで打ち下した拳”から、‘私’は自分の体を張って翠竹をかばつてはいたものの、“背後で喚きつづけた”翠竹を“黙つておれ”と制止しながら、“翠竹が悪い。どうか勘弁して下さい”と“しきりとあやまつた”わけである。しかのみならず、今までの努力が翠竹に“みんなぶち壊”され、“もう完全に訣裂だ”と観念した‘私’が“舅父の代りとしてきた自分の任務を思ふと、私は身を切られるやうに痛い”と吐露しているように、“任務”が失敗に終わるのではないかと危ぶむ‘私’はあくまで舅父の代弁者に過ぎないことを証明しているのである。

その後のことを‘私’はこう締め括っている。

ああ、私はそれからの出来事をここにくどくどしく書かうとは思はない。何はともあれ、翠竹を徹底的に婚家に留めなければならないところに弱点があるのだ。それからは私が凡ゆる手段を尽してあやまりつづけ、そして一時間後には無事翠竹に金蓮をつけて留めることに成功し、ほつとして帰途についたことだけを記して置かう。(Ⅲ⑤)

要するに、“今日の目的”を達成した‘私’は、舅父に対する社会的責任を果たした自分の行動を肯定的に捉えているのである。

2.5. 破局

ところが、一人で帰途に着いた‘私’は“別れる時に見交はした翠竹の恐怖感に溢れた表情”を思い浮べると、“何かしら不安な気持ちにとらはれ”、“果してあれでをさまるか。あれ程深刻だつた関係をあまりに形式的に妥協しはしなかつたか”と自問することは、舅父に課せられた“任務”を果たしたほか本当は何も解決していないことを知っていた証拠である。にもかかわらず、“或は奇跡が現はれるかも知れない”“どうかうまくいつて呉れ”と念じる胸中からは、‘私’の現実を逃避したい一面と自分の無責任な立場が包み隠さずに曝け出されている。それだけではなく、“翠竹が自分とともに帰りがつてゐることは、よく分つた”、翠竹が“死に行くよ”と聞いて“さうだ、翠竹のやりさうなことだ”とある通り、翠竹の苦境を確実に察知した‘私’が“大丈夫だ、辛^{ツツ}棒しろ”と“眼で翠竹に叫びかけ”ることは、舅父が翠竹に“我慢”を強要することと同質のものなのではないか。そうした‘私’の言動こそが、“一応は私を信頼”し婚家に戻ってきた翠竹の“もう一度、といふ淡い期待”を打ち砕いてしまったのであろう。それに、「廟庭」から徹底的に押し黙ってきた翠竹が沈黙を破り“激しい涙声で喚き立て”て、“もうどうでもいいといふ風に”“棄鉢”になったのも、‘私’の度重なる失策や失言によるものだと考えられる。さらには、婚家に引き返した‘私’に“眼もくれずにそのまま外に駆けだしてゐた”翠竹の振舞いを通して、彼女にとって‘私’はもう“信頼”できる存在ではなくなったことが読み取れる。翠竹に残された道は、まさに「廟庭」の最後の場面において舅母が泣き叫んでいた“翠竹が死に行くのも当然だよ”という如く、もはや“死を求めるより外に方法がないのであろう”と、“ああ、これで私は翠竹の苦衷をはつきりと身を感じたのだ”が、もう時すでに遅かった。“河の流れに向つて駆けてゐる”翠竹に‘私’が“全速力で駆け寄”っても“なかなか翠竹に追いつけない”ことから、死を選ぶ翠竹の意志がどれほど強いかが窺い知ることができる。

やがて河に飛び込んだ翠竹を駆け付けてきた百姓達が救助したものの、“自分の無力をこの時ほど、強く感じたことはない”‘私’は“流れ落ちる涙をおし止めること”すらできなかった。一方では、気を失った翠竹が早く“正気にかへればいいかと私は全く途方にくれた”という困惑からして、今までは舅父の指示通りに自分の役割を演じてきた‘私’が、翠竹が死に行くような想定外の事態に接すると、たちまち対処法に窮するの無理はない。もっとも、これまでも度々“困つたことになつたと舅父の顔を思ひ浮べ”てきた‘私’の脳裏に、また無意識的に“ふと舅父の顔が眼の前に浮び上つた”こと自体、‘私’があくまで舅父の代理人でしかないことの何よりの裏付けである。“死に行くのも当然だよ”とほのめかした舅母の顔はおろか、すぐ横にいる翠竹のことも触れずに、舅父には一体“どうして説明したらよいか”と“嘆息してあれこれと考へてみ”る‘私’には、舅父に対する自分の社会的責任以外頭がないことは明白である。

事後、‘私’は次のように思い返してみる。

翠竹が水にとび込まねばならない気持ちが、その時余計に自分のやうに感ぜられるばかりだ。実家と婚家の何れにも安住し得ない身にしてみれば、死を求めるより外に方法がないのであらう。殊に翠竹のやうな自活の能力のない、環境に支配されながら生きてゐる女性にとつては尚更のことであらう。それが彼女のもつ唯一の抵抗だと思ふと、憎しみは翠竹の夫に向けるより外仕様が
ないのだ。〔中略〕しかし、世間にはさうした男があながち翠竹の夫のみでないのを考えると、翠竹のやうに自殺し果てようとする女性も多いであらう。私は台湾女性に何かしら義憤を感ずる。
(Ⅳ⑤)

つまり、翠竹を死に追い込んだのは夫なる男の責任であると‘私’は力説しているが、それは実家の責任を棚上げした上での結論としか言いようがない。「廟庭」における翠竹の“悲しむべき運命”を成した一因である舅父の社会的立場が如何に「月夜」における‘私’の言動を左右したのかは、‘私’の眼前に一度ならず浮かんでくる“舅父の顔”が最も象徴的である。翠竹の表情を注意深く観察した‘私’ではあったが、翠竹と意志の疎通を図ろうとせず、ただ一方的に“舅父の代理人”としての責任を果たそうとした‘私’の無関心・無理解は、翠竹をさらなる絶望へと追い詰めていくに違いない。しかも、‘私’の翠竹の意志を無視するような行為は、“翠竹には眼もくれずに”振舞う夫とは何ら違いはない、という点においては、‘私’は翠竹の夫と同類であるという一側面を見せている。そのことに何ら自覚を持たない‘私’の、夫を“紳士面をした意久地のない”“だらしのない男”と評価する言葉は、取りも直さず‘私’自身にも当てはまることに本人は微塵も気付いていない。

畢竟するに、‘私’は“今日の目的”を達成することもできず、死に行く翠竹を止めることもできず、また入水自殺を図った翠竹を自力で助け出すこともできなかった。こうして、何一つやり遂げることができないまま、‘私’の絶望的なまでの無理解と無力を剥き出しにして物語の幕が閉じるのである。

おわりに

以上の考察を受けて、「廟庭」「月夜」における創作手法の異同について検討してみたい。

「廟庭」は、知識人である語り手‘私’が旧社会に生きる舅父の“用件”すなわち従妹翠竹の離縁話にかかわるまでの委細・心境を、現在の状況を主軸に過去の思い出を織り込む手法で描かれた物語である。現在／過去に対する‘私’の内心の変化を探ってみれば、過去の記憶を肯定的・積極的に扱う‘私’が思い出の中の翠竹への愛着とは正反対に、現実の再婚した翠竹への否定的・消極的で且つ無関心・無理解な態度が鮮明になる。そして、舅父の“用件”に対して、最初は傍観者的な態度を取った‘私’は“義理”の働きで事態に直面せざるを得なかったが、物語中の諸事件を通して、その影響は次第に‘私’の立場・言動・判断にも及んでいることが確認される。したがって、“義理”に縛られる‘私’の一面が窺えると同時に、“義理”は物語を展開する上では極めて重要な要素であることを解明することができた。

また「月夜」は、翠竹と連れ立って問題解決のために婚家へ乗り込んだ‘私’が、姑・小姑・夫三人と交渉するに当たって生じた失策や失言によって話は巧く運ばず、翠竹が死を選ぶまでの経緯が回

想文的な筆致で書かれている。執筆時の慨嘆と照らし合わせれば、‘私’が封建社会に生きる女性に対して義憤を感じたのは疑いようもないことではあるが、作品中にしばしば思い浮かべる“舅父の顔”は‘私’の無理解を象徴すると共に、翠竹の絶望をより深刻に読者に印象付ける効果を有している。加えて、事件の発生に対処する‘私’の態度からして、如何なる場面においても社会的責任にとらわれている‘私’の“無力”な一面が前面に押し出される一方、翠竹の夫のだらしなさを批判しつつも手をこまねき傍観している‘私’も結局は共犯者の一人であることが浮かび上がってくる。言い換えると、翠竹のような女性の悲劇をもたらしたのは旧社会の悪弊のみならず、‘私’のような知識人の無理解・無自覚による二重の迫害だったことが明白になる。

このように、「廟庭」「月夜」とも‘私’を視点人物兼語り手による第一人称小説であり、物語間の筋の連続性と登場人物の関連性が認められる。「廟庭」において自分の社会的立場を守る舅父と、「月夜」において舅父に対する社会的責任を全うする‘私’が、結果的には二人とも翠竹を犠牲にしてしまう理由は、「月夜」の文頭に言い及んでいる“台湾女性の親達がすげなく娘を処分しようとする気持”の背後に隠見する“社会的”“道德的”規範にあることが明確になった。それに、「廟庭」では翠竹の夫を社会地位から判断した‘私’が「月夜」では一変して“憎んでも憎み足りない気がする”ようになったことも、舅父が“その主人だが、わしもすつかり見損つたんだよ”と評価を誤ったことと似たようなものである。これは、知識人たる‘私’に対する“新しいことは何でも知つてゐるんだから……”と期待している舅父の過大評価に過ぎないことを示している。事実、社会的規範の中で生きる知識人が如何に無力なのかは、‘私’の行動から十分理解できるはずである。

結論として、「廟庭」において“義理”に振り回される‘私’と、「月夜」において何らなす術のない“無力”な‘私’の姿はいずれも知識人の偽善を暴露しているが、筋の展開に見られる創作手法の違いからは、連作とはいえ、「廟庭」の通時的な叙述にくらべて、物語を過去として整理してしまうと同時に、虚構化しようとする意図が「月夜」にはあったことが垣間見える。付け加えて、翠竹の一個人の“悲しむべき運命”に着眼した「廟庭」に比して、「月夜」は視点を全“台湾女性”に拡大して、世間の一般的・広範的な不合理さ・不条理さを文頭及び文末の二箇所において論じている点が大きく異なっている。

なお、呂赫若は「廟庭」で書けなかったことを「月夜」で補説しつつ、問題点を掘り下げることにしたが、翠竹が死ぬことによって物語を完結させる仕組みを取らずに、翠竹を生かすことで今後のさらなる展開の余地を残している。『清秋』に収録されている「月夜」の結末には“或る物語の発端”¹²⁾と加筆されており、同跋文には“「月夜」は「廟庭」の続編であるが、何時かこの物語をまとめる日もあるであらう”¹³⁾と書かれている。このことから、この2篇の連作をより大きな物語へと発展させていく意欲を呂が抱いていたことを窺い知ることができる。

注

- 1) 『日記』昭和17年11月7日には“新短篇「月夜」―「廟庭」の続編―を思ひ、起筆して六枚に及び…”、同年12月12日には“短篇「月夜」脱稿。午前九時十分。「廟庭」の続編也。三十三枚”という記述が書き込まれている。また、『台湾文学』に掲載されている「月夜」の文末にも“附記「廟庭」（台湾時報十七年八月号所載）ノ続編トシテ執筆シタルモノナリ”と付け加えられ、さらに『清秋』の跋文には“「月夜」は「廟庭」の続編である”と補足してあるように、「廟庭」と「月夜」が連作となつて

いることは明白である。

2) 「呂赫若論—作品集「清秋」について—」『台湾時報』293号、1944. 6. 10、91頁。

3) 管見が及ぶ範囲での先行研究は以下の25篇がある。(発表順による)

- ▶ 張秀君「呂赫若及其筆下の台灣女性初探」『史學』16・17期合訂本、國立成功大學歷史學系系會、1991. 6。
- ▶ 陳黎珍『呂赫若の研究—人とその作品—』私立東吳大學日本文化研究所碩士論文、1993。
- ▶ 野間信幸「呂赫若—孝を描いた台湾人作家」『東洋大学中国哲学文学科紀要』創刊号、東洋大学文学部中国哲学文学科、1993. 3. 30。
- ▶ 呂正恵「殉道者—呂赫若小説の「歴史哲學」及其歴史道路」林志潔譯『呂赫若小説全集』聯合文學出版社、1995. 7。
- ▶ 鍾美芳「呂赫若的創作歷程再探—以「廟庭」「月夜」為例」私立淡水工商管理學院主辦『台灣文學研討會』發表論文、1995. 11。
- ▶ 溫文龍「受難女性的代言人—論呂赫若小説中的女性角色」『台灣文藝』154期、台灣文藝雜誌社、1996. 4. 20。
- ▶ 徐士賢「大學國文教學的新嘗試—以呂赫若小説專題為例」『世界新聞傳播學院人文學報』5期、世界新聞傳播學院、1996. 7。
- ▶ 楊千鶴「呂赫若及其日文小説之剖析」莊萬壽等編『第2屆台灣本土文化國際學術研討會論文集』台灣師大人文教育研究中心、1997. 5。
- ▶ 林瑞明「呂赫若的〈台灣家族史〉與寫實風格」陳映真等著『呂赫若作品研究』聯合文學出版社、1997. 11。
- ▶ 林載爵「呂赫若小説的社會構圖」陳映真等著『呂赫若作品研究』聯合文學出版社、1997. 11。
- ▶ 陳芳明「殖民地與女性—以日據時期呂赫若小説為中心」陳映真等著『呂赫若作品研究』聯合文學出版社、1997. 11。
- ▶ 黃儀冠「日據時代呂赫若小説中之性別權力結構」『中華學苑』51期、國立政治大學中文系、1998. 2。
- ▶ 張達雅「呂赫若小説中的家庭及主要角色的心理糾葛」『樹德學報』23期、私立樹德工商專科學校、1999. 5。
- ▶ 黃英哲「作品解說」黃英哲編『日本統治期台灣文學 台灣人作家作品集 第二卷 呂赫若』綠蔭書房、1999. 7. 20。
- ▶ 朱家慧『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』台南市立藝術中心、2000. 11。
- ▶ 垂水千恵「呂赫若「月夜」論」『横浜国立大学留学生センター紀要』8号、横浜国立大学留学生センター、2001. 3。
- ▶ 垂水千恵「『清秋』解説」河原功監修『日本植民地文学精選集039〔台湾編〕14 清秋』ゆまに書房、2001. 9. 25。
- ▶ 垂水千恵『呂赫若研究』風間書房、2002. 2. 15。
- ▶ 范博淳「論呂赫若的女性小説」『台南師院學生學刊』23期、國立台南師範學院、2002. 3。
- ▶ 洪珊慧「女人與婚姻的糾葛噩夢—論呂赫若的女性主題小説」『南亞學報』22期、南亞技術學院、2002. 8。
- ▶ 陳貞吟「呂赫若筆下的婦女樣貌及其對婚姻的積極思維」『高雄師大學報』15期、國立高雄師範大學、2003. 12。
- ▶ 張譯文「呂赫若小説之社會思想與女性意識探討」國立高雄師範大學國文教學碩士班碩士論文、2003。
- ▶ 呂淳鈺「都會？田園！—呂赫若的東京經驗與日語小説中對現代性的態度之考察」『台灣文學評論』4

卷1期、私立真理大學台灣文學資料館、2004. 1. 15。

►陳姿妃『呂赫若小説中女性宿命觀研究』國立屏東師範學院語文教育學系碩士論文、2005。

►羅玠旻「呪縛された男—40年代呂赫若作品群」『天理台湾學報』15号、天理台湾学会、2006. 7。

- 4) 前掲垂水千恵「呂赫若「月夜」論」、117頁。
- 5) 現在確認できる呂の作品中、「廟庭」の執筆前に「私」を語り手とした作品は「逃げ去る男」1篇のみであるが、これは「僕」の話を聞いた「私」という入れ子構造で展開した物語であり、「廟庭」「月夜」の叙述方法とは異なっている。
- 6) 現在確認できる呂の作品中、「廟庭」「隣居」「月夜」「玉蘭花」「山川草木」「故郷的戰事（一）改姓名」（初出順）の6篇が「私」を語り手とした短篇である。
- 7) 前掲陳芳明「植民地與女性—以日據時期呂赫若小説為中心」、255頁。
- 8) 前掲垂水千恵「呂赫若「月夜」論」を参照。
- 9) 「廟庭」「月夜」は初出・初版とも章の区切りはない。
- 10) 『台湾語大辭典 上卷』（台湾總督府編1931. 3. 10、国書刊行会復刻版1983. 5. 30）によれば、金亭とは“金紙を焼く亭”である（330頁）。
- 11) 初版では“台湾女性の親達が安易に娘を処分しようとする気持も、また分るやうでもある”に改めた。
- 12) 呂赫若『清秋』清水書店、1944. 3. 17、243頁。
- 13) 同上、338頁。

Lü Heruo's "Temple yard" and "Moonlight night": focusing on the characteristic of "I"

CAI Jiazhen

"Temple yard" and "Moonlight night" of serial cultivation are stories described by "I" who belongs to the intelligentsia. The story is related to cousin's divorce story by uncle's request. The portrait of "I" is clarified from the analysis of the speech and behavior of "I" corresponding to the development of the stripe of the story in this paper.

In Chapter 1, "Temple yard" is divided into six scenes. Afterwards, the situation setting tables are made of the time, place, characters, and the plot development, etc. The relation between the standpoint and the speech and behavior of "I" is examined while tracing the flow of the consideration of "I" to present and the past.

In Chapter 2, "Moonlight night" is prepared and the situation setting tables are prepared in four scenes separately as well as "Temple yard". And, the inside of "I" is analyzed while taking the impression and the reflection being inserted in the plot development into consideration at writing.